

石川淳『六道遊行』論

——歴史叙述をめぐって——

はじめに

本稿は、石川淳がどのような〈歴史の見方〉にもとづいて『六道遊行』を執筆し、そしてそれが小説になった時、いかなる問題意識や同時代の影響を受けているか、ということ进行分析しようとするものである。

石川は、戦中期に歴史叙述・歴史小説批判のエッセイを、一九六〇年代から八〇年代にかけて稗史や偽史についてのエッセイや作品を残している。そのため、石川は〈歴史〉をどう捉えるか、どう叙述するかということに意識的であったと考えられる。そのような点を踏まえ、『六道遊行』を〈歴史〉との関連という先行研究とは異なった視点から捉えなおし、石川の歴史を題材とした作品群の中に位置づけたい。そうすることで先

吉田拓也

行研究とは異なった石川作品の変遷の一端が把握できるのではないだろうか。

『六道遊行』は、昭和五六年六月から五七年一二月、集英社『すばる』に一九回にわたり連載された。これは石川の歴史を題材とする作品の中でも最晩年のものである。また、雑誌連載の最終回末尾には、「参考文献」として、『莊子』、『万葉集』、『懐風藻』、『日本霊異記』、『水鏡』、『古事談』、岸俊男『藤原仲麻呂』、横田健一『道鏡』、宮田俊彦『吉備真備』、宮井義雄『律令貴族藤原氏の氏神』が列挙されている。

この作品の特徴としては、主人公小楯が天平期の奈良と、作中における「現代」をタイム・スリップし、物語の最終盤をのぞいて、二つの時代が章ごとに交互に描かれている、ということが挙げられる。

『六道遊行』の先行研究は、「権力と反権力」や「精神と物質」といった二項対立に還元して論じるものが多い。そのほとんどは藤原仲麻呂や道鏡を権力側、小楠が盗賊たちを反権力、自由側に置いて対立させ、作品において反権力、自由側の人間の運動エネルギーを描きだしている、という構成で論じられている。

たとえば、李忠奎氏は、「この作品は奈良朝の阿修羅の時代を背景として権力のために陰謀と策略といった権謀術数を繰り広げる武家と公卿、そこに防人の掟を破って賊の頭となった小楠が登場する。「世をもくつがへす法力をこそ」と願う小楠に叛骨精神を窺うことが出来る」と述べるように、武家と公卿という権力者に対して賊の頭である小楠の反権力がある、としている。

また、野口武彦氏も、「中央権力が確立を急ぐ律令制度からの脱落者が、そのまま犯罪者になって反抗する。みずから防人くずれをもって任じる小楠も、またその手下たちも、こうした社会的背景から作中に拉しきった人物たちであった。当然、上層の貴族政治も揺るがずにはいられない」と述べ、「中央権力」とそこからの「脱落者」の反抗という図式を描いている。

さらに、鈴木優作氏は、「本作は国家権力と盗賊の自由なる精神という、言ってみれば単純な二項対立図式の下にあるテク

ストであることになる。／さて、本作がこうした二項対立図式の範疇にあることは確かであろうが、それが国家権力——盗賊の自由なる精神、という関係だけでなく、国家仏教——民間信仰という図式をも新たに見出すことができるのではないか、というのが本稿の趣旨である」というように、「国家仏教——民間信仰」という新たな二項対立図式を描出している。

これらの先行研究は、主人公である小楠の目的である葛城山行きを二項対立図式の元で分析したり、小楠が標榜する「天地自然の道」という生き方の解釈を提示したりするという点において、意義のあるものである。

だが、論じられていない部分もある。それは、天平期の奈良という時代の歴史叙述が物語の半分を担っていることの意味であり、『六道遊行』の「参考文献」との関連性であり、作中における「現代」と天平期の奈良との関係性である。特に、先行研究においては、小楠を中心とした天平期の奈良の分析に比重が置かれ、「現代」に触れたとしても天平期の奈良との関係を論じたものは見当たらない。

そのことを踏まえ、本論文では、まず歴史叙述の物語り性を踏まえた上で、『六道遊行』が最終回末尾の「参考文献」と比較してどのような「歴史の見方」に基づいているのかを明らかに

にする。さらに、なぜ天平期の奈良と「現代」を往還するような構成になっているのかということを分析する。そして石川は、同時代の物質主義を批判するために天平期の奈良と「現代」を対置させる構成をとり、「参考文献」の〈歴史の見方〉とは異なる〈歴史の見方〉を採用したのではないか、ということを描きたい。

なお、本稿では、『石川淳全集 第十卷』（筑摩書房・一九九一年三月二八日）所収の『六道遊行』を本文テキストとした。また、引用に際して漢字の旧字は新字に改めた。

一、歴史叙述と歴史の見方

本節では、まず、次の三点を述べる。

一つ目には、歴史叙述は、同じ史料や題材を扱ったとしても、執筆者の〈歴史の見方〉や叙述スタイル、同時代のイデオロギーなどの影響によってその方向性が変わる、相対的なものであるということ。二つ目は、『六道遊行』の「参考文献」のうちの一つである横田健一氏の『道鏡』は、「称徳・道鏡純愛説」という〈歴史の見方〉に則って叙述されているのではないかということ。三つ目は、『六道遊行』における道鏡の人物設定は『道

鏡』を参考にしながらも、『道鏡』の「称徳・道鏡純愛説」も、『水鏡』などに表れている「称徳悪女説」も取らず、称徳天皇の性の奔放さを肯定するような〈歴史の見方〉に則って叙述されているのではないかということ、である。

以上のことから、『六道遊行』では、横田氏の「称徳・道鏡純愛説」というひとつの〈歴史の見方〉に対して、それとは異なった称徳天皇と道鏡との関係性があり、称徳天皇の人物形成がなされている、ということを描きたい。

まずは、歴史叙述について述べていきたい。歴史叙述は、断片的な過去の出来事を、あるイデオロギーやスタイルや《歴史の見方》などに基つき繋ぎ合わせ、ストーリーとして語る言説である、ということが近年の歴史研究における考え方の一つとして定着している、といえる^①。また、ここでいう〈歴史の見方〉とは、それぞれの叙述者の、歴史的出来事に対する解釈あるいはその枠組みであるとしておきたい。

こうした歴史研究の考え方は、たとえば、二〇一八年に出版された岡本充弘氏の『過去と歴史「国家」と「近代」を遠く離れて』では、次のように述べられている。

歴史には個々の事実を探求していく側面と、個々の事実

を繋ぎ合わせそれに意味を与えていく過程がある。たとえ仮に史料を証拠として過去の事実が確定されたととしても、その史料が示しうるのは、史料に対応する断片的な事実でしかない。断片的な個々の事実を結び合わせ、意味をもつ物語という形式を付与するのは歴史家である。⁵⁾

そして、富山多佳夫氏が現在において「過去の資料を読み、それを解釈することとは」つまり、「フィクションではない未来（つまり、われわれにとつての現在）の侵入をうけるということである。」というように、歴史叙述が恣意的なものであるとすれば、それは叙述する現在における叙述者の解釈の影響を受けざるを得ないだろう。⁶⁾ そうであるならば、同じ歴史的出来事を題材にしたとしても、同時代の知的枠組みによつて、その解釈と叙述内容は変わらざるをえない。

つまり、歴史を叙述する際に過去の一連の出来事を伝えようとするには、叙述する人間が、ある観点に立ち、生きている現代における関心のもと、同時代のイデオロギーの中で、重要な事柄を取り上げ、構成を考え全体の話を組み立てるほかないのである。その点においては、歴史を語ることに物語を語ることは共通しているといえる。

また、歴史叙述について、石川淳も戦中のエッセイで次のように述べている。

いつたいふつう歴史というとき、ひとはなにを思ひおこすか。具体的には、歴史家が書いた記述に依つて吹きこまれてゐるところの、過去の人間の社会像にほかならない。(中略) 歴史家の事件解釈がかならずしも正しいとはいへない。歴史家の専門知識は複雑であらうが、認識の深淺は別のことである。⁷⁾

ここで石川は、歴史叙述が「歴史家が書いた記述に依つて」いるところの「過去の人間の社会像」であること、そして「歴史家の事件解釈がかならずしも正しいとはいえない」ということを指摘している。つまり、石川も戦中期にはすでに歴史叙述の恣意性を意識していたということである。

次に、横田氏の『道鏡』がその歴史叙述において、どのような(歴史の見方)を採用しているかを見ていきたい。『六道遊行』の「参考文献」の一つである横田氏の『道鏡』を見ると、称徳天皇と道鏡の関係性において、「称徳・道鏡純愛説」という見方で歴史を捉えているといえる。これには、坂口安吾の小説「道

鏡」(一九四七)などの影響⁽⁸⁾が考えられる。田中貴子氏は『悪女伝説の秘密』⁽⁹⁾で「称徳・道鏡純愛説」について次のように述べている。

現代でも純愛がトレンドとなった時期があるが、称徳らの純愛説は、まるで戦前の悪評の反動のように蔓延していった。共通するのは、称徳が道鏡にひかれた理由を、政治的に孤立し、結婚という「女の幸せ」も許されなかった彼女の立場に求めるものである。また、道鏡が巨根であったという伝説は根拠のないものとされ、称徳は彼の肉体ではなく学識や思いやりの深さに愛情を感じたのであり、二人の結びつきは真実の愛であった、という。

また、田中氏は同書で横田氏の『道鏡』が「称徳・道鏡純愛説」を採っていることについても言及している。⁽¹⁰⁾ 実際に横田氏の『道鏡』には、いくつかの記述から「称徳・道鏡純愛説」を採用していること、そしてそれが著述者の解釈によって立つところのものであろうことがうかがえる。たとえば、

天皇には、道鏡をそうした呪術や、唐から新渡来の密教的

教学・梵文などに達した新知識としてのみ、敬重・寵愛されたのではなく、なんらか人がらのごときものにおいて、両者が相したしむ、いわばうまのあう要素があったのであろう。それを肉体的にのみ解するのは浅薄にすぎる。⁽¹¹⁾

という記述からは、称徳天皇と道鏡との関係を、単なる肉体的なものとして解するのではなく、精神的な関係性として捉えているということがいえるだろう。そしてそれは、「人がらのごときもの」における「うまのあう要素があったのだろう」といった推論に表れている。

もちろん、横田氏は称徳天皇の詔勅や行動、宸筆などから客観的な推論によって歴史叙述を行っている。⁽¹²⁾ だが、やはりここで主張しておきたいのは、そのような歴史叙述が、叙述者の〈歴史の見方〉によりつつ、個々の歴史事実を結びつけられることでもなされているということである。

つまり、横田氏の『道鏡』においては、称徳天皇と道鏡の間には「浮薄な交情」などなく、両者の親しみは「肉体的にのみ解するのは浅薄にすぎる」、という言葉に表されているように、「称徳・道鏡純愛説」を基調として、称徳天皇と道鏡の関係性が構成・叙述されているといえるのである。

その横田氏の『道鏡』を「参考文献」に据える『六道遊行』には、作中における道鏡の人物設定など、『道鏡』によっているところが多くみられる。たとえば、葛城山において道鏡が身につけたとされる宿曜秘法に関しては、横田氏の『道鏡』の解説をほとんどそのまま登場人物が台詞で語っている¹⁵⁾。

ただし、石川は、道鏡の生い立ちなどは『道鏡』を参考にしながらも、「称徳・道鏡純愛説」に関しては採用しなかった。それでは、『六道遊行』における称徳天皇と道鏡との関係性はどのように描かれているのだろうか。

まず、道鏡は巨根であり、称徳天皇と関係を持つことで出世した、と語られている。また、称徳天皇は性欲旺盛で広陰であるとされている。さらに、小楯らの登場人物が称徳天皇の色好みを評価しているということが挙げられる。特にこの点は、横田氏『道鏡』のみならず、そのほかの「参考文献」である『古事談』『水鏡』などとの相違点であるといえる。

次の引用は小楯の仲間である七瀬という女性のセリフである。これは、称徳天皇と道鏡が性的な関係にあること、そして道鏡が巨根であることを示している。

〔略〕 姫のみかどのおんなやみは気鬱のやまいとか。女の

鬱した気をこころゆくばかり晴らすには、たくましい男の気がなによりでございます。道鏡法師はさきほどの歌の文句にもあるとおり、あくまで黒いなにやらときこえ高きものなれば、てつきりくだんの逸物をもつて御葉に侍したに相違なしと、これは垣のぞきにも見てとれましょう。(略)〔

(第九章)

ここでは「くだんの逸物をもつて御葉に侍した」とあるように、称徳天皇と道鏡との関係性が示唆される。そして、「くだんの逸物」という言葉に加え、「参考文献」にもある『日本霊異記』から引用された「さきほど歌の文句」に、「黒みたるわがおおふぐり」とあることから、『六道遊行』においては道鏡が巨根であることが示されている。

また、称徳天皇が色好みであるという設定は、称徳天皇の「御悩のもととはいへば」「聞のかたらひから遠ざかりぎみのせみではないか」という地の文に表わされている。あるいは、七瀬の「上皇さまのおむづかりもさぞかし」というセリフからもうかがえるだろう。

そして、広陰という設定は、同じく七瀬の「どこやらも酒甕ほどに大ぶりとうけたまはれば」というセリフや、次のような

記述にあらわれている。

「略」めづらしや、姫のみかどの大器、上にあり。これ世のしづめぢや。大器は大器を呼ぶ。呪のはたらきあやまたらず、やがて足らざるをみたしめて、おむづかりもしづまらうて。さかづきをあげて祝ふべきことぢやよ。」(第七章)

沙彌という小楯の仲間のセリフは、「姫のみかどの大器」というように、称徳天皇が広陰であることを示唆している。そして、その「大器」が道鏡の「大器」によって満たされることを「さかづきをあげて祝ふべきことぢやよ」として、よいことであるとしている。また、このような称徳天皇の性的欲望に対しては小楯も評価している。

小楯らは、称徳天皇と関係を持つ道鏡を、「この恋の炎の絶えぬかぎり、きづなの切れぬかぎりは、道鏡の座はゆらぐことがあるまい。恋のまことこそ、人間の本性、まつりごとの拠つて立つ根元だ。」(第二三章)とあるように、最初は評価している。

だが、「道鏡は天位に目がくらみ、天下の事に気もそぞろとなつて、みかどのくるしいお胸の内を察せず、恋のまことをわすれたと見えた。とかく天下の事をいひ立てるやつ、よこれ

た料簡、あさましい。」(第十九章)とあるように、小楯は、道鏡が称徳天皇との肉体関係から距離を置いて政治に明け暮れていると聞くと、道鏡を「あさましい」と批判している。

しかし、先ほども述べたように、道鏡とは対照的に、称徳天皇は小楯らに評価されている。次の小楯のセリフは、称徳天皇が道鏡と反対に「恋のまこと」という性欲に忠実な生き方を貫いたことへの賛美をあらわしているといえる。

「姫のみかどは恋のまこと一筋をつらぬいて、みごとにはてなされた。俗事をよそに、遊樂のはて、わき目もふらぬけなげなおん振舞。歓喜のただなかに立ちながらこの世あの世の堺を超えさせたまふか。これぞ王者の死よ。死を踏まえての神あそび。今はなきおんすがたは遠く天翔りたまう。凡下の追つても追ひつくかぎりでない。ただ空を仰いで歎ずるばかり。」(第二三章)

これに比べて、称徳天皇と道鏡との肉体関係を語る『水鏡』や『古事談』では、その挿話を入れる意味として、称徳天皇への強い批判のニュアンスが込められているとされている。¹⁴⁾つまり、『水鏡』や『古事談』においては、称徳天皇は浮乱であり、

色欲に溺れて国を傾ける〈悪女〉であると考えられているのである。

称徳天皇は『六道遊行』では、藤原仲麻呂および道鏡と関係をもっていた。だが、そこには『水鏡』や『古事談』に示されているような〈悪女〉のイメージはなく、むしろ「恋のまこと」を貫いた人物として作中人物によって評価されている。その一方で、道鏡は、第九章で「天位に目がくらみ」、「恋のまことをわすれた」として、小楯に痛烈な批判を浴びせられているのである。

二、「参考文献」との関係性

本節では、まず『六道遊行』の「参考文献」に記載がある『水鏡』、『古事談』¹⁵の引用について述べる。

『六道遊行』第二章の地の文では、『古事談』と『水鏡』が引用元として明記され、「姫のみかどの死の顛末」と「その後継者決めの成り行き」が語られている。このうちの「姫のみかどの死の顛末」は、『古事談』と『水鏡』（古本系）、『水鏡』（増補本系）¹⁶においてそれぞれ内容が異なる。そして、「姫のみかどの死の顛末」の引用元は『古事談』ではあるが、『六道遊行』

は、『古事談』ではなく『水鏡』（古本系）にある部分を含んでいる。なぜ『水鏡』ではなく『古事談』が選択され、そして『水鏡』の部分が付け加えられたのだろうか。以下に詳しく見ていきたい。

まず、第二章の当該箇所を少し長いが引用する。

後世の古事談の記述に依れば、姫のみかど、道鏡の逸物をもなほ不足におぼしめされ、山の芋をもつて異なかたちに作りなして、これをこころみたまふに、折れこもるとしかじか。すでに腫れふさがつて大事におよぶとき、百済の医師小手尼、その手みどりごの手のごとくなるが、とくと見奉つていふには、このやまひ癒ゆべしと、手に油を塗つてこれを取らうとする。をりしも、かたはらに侍した藤原百川、こやつ霊狐めと、つるぎを抜いて小手尼の肩を斬る。かくては癒ゆべきやまひもつものばかり。姫のみかど、ついにあえなくなりたまふ。百川のいらざる振舞、かへつて宝算をちぢめ奉るに似た。かの異物はもと道鏡の献上に係るものである。道鏡、姫のみかどに仕えまつるためには、もつばら恋のつとめに精をそそぎまひらすべきところ、あらうことか天下の国家のとおろかな沙汰に気をうばはれ、

玉の床にみこころをみたしめず、あやしきものを献じて非力をおぎなうか。色の道に懈怠の罪、ここに至つて笑止にも、またあさましくも見えた。

以上のように、第二章の「姫のみかどの死の顛末」については「古事談の記述に依れば」とあることから、『古事談』を引用していることが確認できる。

この「姫のみかどの死の顛末」の典拠を比較すると、その差異として「姫のみかど」の死の原因の違いが挙げられる。まず、『古事談』には、姫のみかどが慰めに使う山芋を自分自身で用いたとされている。¹⁷だが、『水鏡』（古本系）では山芋は道鏡が差し入れたものであるとされており、『水鏡』（増補本系）では、「賢臣」であるとされる藤原百川が「王法」を守るために差し入れたものであるとされている。¹⁸なお、『六道遊行』においては、先の引用の通り、山芋は道鏡が差し入れたものである。これは『古事談』にはない部分で、『水鏡』（古本系）における物語の内容である。

つまり、第二章においては、称徳天皇が自らの慰めに山芋を用いたことが原因で病気になる崩御した、という『古事談』のエピソードに、山芋が道鏡の差し入れたものであるという『水

鏡』（古本系）の部分が付け加えられているのである。

これは、『水鏡』（古本系）のみを典拠にしたのでは称徳天皇が具体的に何をしたかということが語られないためであると考えられる。『水鏡』（古本系）では、道鏡が献上した山芋は「おもひかけぬもの」²⁰と表され、それから起こったことは「あさましきこといできて」²¹と表現されるように、直接的な説明が避けられている。よって、具体的なエピソードに触れるために『古事談』が採られたのではないだろうか。

反対に『古事談』は、「称徳天皇、道鏡が陰猶ほ不足に思し食されて、暑預を以て隠の形を作り、之を用ひしめ給ふの間、折れ籠むと云々。仍て腫れ塞がり、大事に及ぶ」²²とあるように、エピソードは具体性を持っている。だが、『古事談』のみを典拠にすれば、道鏡の献上することに触れられない。だからこそ、これら二つのエピソードの複合によって、『古事談』においては、前章で見たように、自らの意思で自分を慰める淫乱な女帝、つまり「悪女」として批判的に描かれていた称徳天皇を、『六道遊行』では、道鏡の精力の「非力」に読み替えることが可能となっているのではないだろうか。

つまり、山芋を用いたことは称徳天皇に非があるのではなく、道鏡が「もつぱら恋のつとめに精をそそぎまいらすべきところ、

あろうことか天下の国家のとおりかな沙汰に氣をうばわれ、玉の床にみこころをみたしめ」ることができなかつたため、「かの異物」である山芋を自分の代わりに称徳天皇に送り「非力をおぎな」おうとしたこと、すなわち「恋のまこと」に背いたことに非があるのだ、と読み替えることが可能なのではないかということがある。

このような、歴史叙述の単なる引用ではなく、称徳天皇と鏡の関係性は、称徳天皇の多大な性的欲望に紐付いたものであったが、その性的欲望は非難されるものではない、という石川の〈歴史の見方〉にもとづいた典拠の用い方によって、『古事談』や『水鏡』における称徳天皇の〈悪女〉のイメージを読み替えることができると考えられる。そしてそれは、前章における登場人物の称徳天皇に対する評価も合わせて、次章で述べる、天平期の奈良と「現代」、称徳天皇と真玉との関わりにおいて活かされているといえる。

三、天平期の奈良と「現代」との関わり

本節では、まず、『六道遊行』の前半部では天平期の奈良の出来事と作中における「現代」の出来事が対応したり、真玉と

称徳天皇のイメージが重なったりしている、ということを描く。さらに、称徳天皇の〈悪女〉のイメージが真玉に映されているのではないか、ということを描く。そして〈悪女〉のイメージが映された真玉は、「現代」における「物質主義」の権化として没落し、反対に称徳天皇は「恋のまこと」にかなう人物として描かれているのではないか、ということを描いた。

『六道遊行』には、第一章から第三章にかけて天平期の奈良と「現代」において対応関係が見られる。そして第五章では真玉と称徳天皇のイメージが重なり合っている。

次に引用するのは、天平期奈良と「現代」との状況の対応関係である。まずは、天平時代を舞台とする第一章で、白い被衣の女が出るという噂を聞いた小楯が、同じく噂を聞きつけ、女を取り囲んだ若者たちを追い払う場面である。

めんめん、いらつて、輪の中に取りこめて捕へようととかれば、女は飛びちがへて、そこにここにと、色香はさらになやましく散る。ときに、小楯がついとまんやかに割つて入つた。ものもいはず、ただ鞘ぐるみ振りかざした白銀の目貫の太刀が光つて、はやるわかものどもをおさへた。

はむかつて来るほどのものではなく、足みだれて、みなちりぢりに逃げ去った。(第一章)

また、同じ第一章では、「とたんに、太刀がひらめいて、下役二人その場にのけぞつてたふれた。なきがらはつい草むらに蹴こまれた」というように、小楯が盗まれた太刀を追ってきた役人を切る場面がある。

これらの場面は、次に引用する第二章における「現代」と対応している。

「あたし、さつきかへり道に酔はらいの不良学生にからまれてこまつたとき、横合からあらはれて、追つばらつてくれたひとがゐたのよ。どうもこのひとらしかつた。そのステッキを振りまはしてさ。」

小楯の太刀はいつのまにか銀のにぎりのついた黒い杖になつてゐた。

「さういへば、宵のくちにその町角で、デカが二箇のされたとかいつて、さわいでゐたつけが、こいつのしわざかな。こいつが不良に入れかはつて、おまへをここまで追つかけて来たことになるのか。」

「現代」と天平期の奈良において、「不良学生」と「わかもの」、「デカ」と「役人」という対応関係が見られる。そしてそれは、女が男に囲まれているという場面に小楯が割つて入るといふ状況に見出せる。また、小楯に切られた「役人」と「のされたデカ」が、その人数においても、小楯にやられたという点においても一致しており、「現代」と天平期の奈良が重なり合っていると見える。

続いて、第二章における、「現代」にタイム・スリップした小楯が真玉と男に出くわす場面がある。ここで真玉を女房とする男は、「そのあとはまたベッドで、こいつのはだかを小つぶどくあつかつて、さかさにしたたり、しめあげたり、ひつぱりたい、拷問は明方までつづく」(第二章)というセリフを述べる。このセリフと対応するのは、第三章における小楯とその仲間である飛魚との会話における、次の言葉である。

「見るものはたしかに見てとつた。」

「閨のけしきをか。」

(中略)

「なんの、やくたいもない。おれがすで見たものであつたよ。」

「すでにとは、いついこと。」

「砂のかなたの世界でな。また砂がふつて来たやうだ。」

これらのセリフからは、小楯が田村第での称徳天皇と藤原仲麻呂との「閨のけしき」と、「現代」で見た真玉と男とのやりとりを重ね合わせ、「おれがすで見たもの」であるとしていることがうかがえる。

また、第五章では、次に引用するように真玉と称徳天皇が重なるイメージが描写されている。

そのとき、仲麻呂の閨のうちに、小楯の目を打つて、たちまち一面の大鏡が壁にせり出して来た。かの真玉の部屋の壁に取りつけた金びかの枠の鏡である。鏡の中にくれなるの濃染の衣を裾長く着て真玉と見まがふ女がある。女は鏡から抜け出て、裾をかかげ袖をひるがへして舞ひはじめた。今、女の顔は真玉ではなくて、それはみかどの顔であつた。みかどは舞ふ。五節の田舞といふものか。管弦の音はなやかにこつて、閨は真紅に燃えた。みかどの踏みとどろか

す足の下に、仲麻呂の枕もあたまも蹴ちらされて、醜草の嵐になびくに似た。みかどはたからかに笑つて、顔は歓喜にかがやいた。

「女の顔は真玉ではなくて、それはみかどの顔であつた」ということからもうかがえるように、ここでは、称徳天皇と真玉のイメージは重なり合っている。

しかし、その後は真玉と称徳天皇のイメージは重ねられることがなくなり、「現代」と天平期の奈良も、第一章から第五章までのような対応関係もなくなる。ここで、称徳天皇と真玉のイメージが重なつたということは、先にみた称徳天皇の〈悪女〉のイメージが、真玉の方に写されたということではないだろうか。

ここでいう〈悪女〉のイメージとは、本稿第一章で確認したような国を傾ける存在であると考えたい。だが、色欲に溺れ国を傾けた称徳天皇とは異なり、真玉は物質主義に溺れた存在であるといえる。その点において、真玉は通常の〈悪女〉のイメージとは少し異なる。

真玉は、興行師の夫である浦見大蔵の遺産を目当てに結婚を承諾し、財産をすべて真玉に譲らせるよう遺言書を作らせる。

そして、その書類ができた後は「書類が生きてものをいひ出すためには、御当人に消えてもらふのが早いやうだね」（第六章）と、大蔵を殺そうとする。大蔵の死後、彼が建てた、玉丸という真玉が産んだ子のための幼稚園である「白玉学園」は潰れる。この「白玉学園」は、第一六章にあるように、大蔵の「腹の中の夢」であり、「形式を取つて実現に乗り出した」ものであった。真玉は、大蔵が早く命を落とすように、彼がよく飲む鴨の粥に、針を仕込んでいた。大蔵は、「太鼓腹がばくりとたてに割れ」て絶命するが、その際、割れた腹の中には、「ざつと千本ほどの針が臍腑にひしと刺さつてゐた」（第一八章）。このように、性をもつてではなく、金銭的な欲のために真玉は財産を目当てにして大蔵を殺害した。これも、性的なものが原因ではないにせよ、相手の身を滅ぼしその私財を傾けるといふ意味において、一人の〈悪女〉であるといえるのではないだろうか。そのような意味における〈悪女〉のイメージが反映される真玉は、「現代」の物質主義の体現者として金儲けに走るが、大蔵が残した負債によって真玉に財産は入らなくなり、最後には没落する。「王者の死」と小楯に評される称徳天皇の最期とは対照的であるといえる。

次の引用は、浦見大蔵の死後没落する真玉の描写である。

真玉は紙人形のやうにうすくふらふらと浮いて出た。こ
れが真玉だらうか。髪はしらがにみだれ、顔は血の気がう
せ、げつそり瘦せかけて、老いさらばへたすがたであつた。
当人はさうとは気がついてゐないらしい。あひかはらず花
模様衣装の、しかし着こなしはくづれて、のこりの色香
もないのに、わざと媚をふくんでしなを作つたのがさむざ
むと見えた。（中略）狂女。遠くに犬が吠える。狂女は紙
をこまかくちぎつては振りまく。銀行通帳のやうである。
そのあとから、道化は地べたに散つた数字を一つ一つひろ
つて、ふところに入れてはまたこぼしながら、とんぼを切
りそこなつてころがつた。（第二章）

再起を賭けた事業に失敗し落ちぶれた真玉は、「銀行通帳」
をちぎつて振りまく。ここには、金儲けという欲に溺れた〈悪
女〉の類型が描かれているといえるのではないだろうか。

また、『六道遊行』には、「現代」の物質主義を批判的に描い
ている箇所がある。「現代」にタイム・スリップする小楯の、
飛魚の問いに対する答えがそうである。

「物とは。」

「かたちあつて、ころなきがごときものだ。かなたの世
界では物がおびただしい繁昌と見える。人間まで物よ。生
きてはゐても、ころが抜けて、右往左往、めいめい勝手
にあばれまはつて始末がつかぬ。(略)」（第十九章）

「現代」においては、「物がおびただしい繁昌」を見せており、「人間まで物」であると小楯は述べる。そして、「物」と対比的に述べられているのが「ころ」である。

そして、その「ころ」が抜けて「勝手にあばれまは」る「現代」の人間は、「物」に執着しているといえる。例えば、第十章の「白玉学園」に母親たちが集まる場面での、「着かざった衣装」や「車の新型」といった描写に、物質主義的な一面がうかがえるだろう。このような物質主義を体現しているのが真玉であるといえる。

『水鏡』や『古事談』による称徳天皇の〈悪女〉のイメージは、第五章において称徳天皇と象徴的に重なり合い、対応関係にあった真玉に映される。真玉はその後、称徳天皇と重ねられることなく、「現代」において夫を利用して金儲けをしようとし、放肆に振る舞う。そして最後には破産し、落ちぶれた姿が描か

れる。この点から考えて、真玉は物質主義の権化として表されているといえる。

反対に、称徳天皇は性的に奔放な人物であるように語られるが、そこに〈悪女〉のイメージはなく、作中人物によって「恋のまこと」と「恋のころ」にかなう人物であるとされているといえる。

そしてこの称徳天皇と真玉の対照的な描かれ方は、「現代」における「ころが抜け」た物質主義を批判するとともに、「ころが抜け」ていないであろう天平期の奈良における、称徳天皇の積極的評価につながっていることを表しているといえるのではないだろうか。

まとめ

歴史叙述は、個々の出来事を物語化する際、プロット化しなければならぬ。そしてそれは、同時代のイデオロギーや書き手の歴史の見方によって規定される。横田健一の『道鏡』は、称徳・道鏡純愛説」といえるような〈歴史の見方〉を持ち、それに対して『六道遊行』は、称徳天皇は性欲旺盛であるがそれが非難されるものではない、という〈歴史の見方〉を持つ。

さらに、『六道遊行』においては、真玉という「現代」の女性に称徳天皇が持っていた〈悪女〉のイメージが映され、物質主義的な現代に対する批判となっている。反対に称徳天皇は、「恋のまこと」「恋のこころ」にかなうような人生を生きた人物であると作中で評価されている。

このような『六道遊行』の〈歴史の見方〉は、真玉を通して物質主義的な現代の批判をするため、そして自身の欲楽、つまり「恋のまこと」を貫いた称徳天皇に対する評価を行うために、石川によって採択されたのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 李忠奎「『六道遊行』論——「因縁」について」『日本文学誌要』第七四号・法政大学国文学会・二〇〇六年七月
- (2) 野口武彦「巨根伝説の探求——『六道遊行』小論——」『すばる』昭和五十八年六月号・集英社・一九八三年六月
- (3) 鈴木優作「〈抵抗〉としての民間信仰——石川淳『六道遊行』論——」『蓮花寺仏教研究所紀要 第九号』・二〇一六年三月
- (4) 言語論的転回以後の歴史叙述の物語り論は、アーサー・ダントの『物語としての歴史』やヘイドン・ホワイトの『メ

タヒストリー』を起点に展開されてきた。遅塚忠躬氏は、そのような物語り論について、「歴史学という営みの性質を吟味する」書である『史学概論』東京大学出版会・二〇一〇年五月一二日で、次のように述べている。「確かに、歴史家がある事実を取り上げるのは、その事実がある脈絡（コンテクスト）の中に位置づける意味づけるためである。したがって、孤立した事実を吟味すること（考証）は、歴史学にとってはそこで完結した作業になるわけではない。そして、歴史学は、さまざまな事実を素材とし、それらを組み立てて歴史像を構築するのであるから、その構築作業は一種の物語り行為であると言つてよい。歴史叙述（歴史像構築）の物語性を指摘したのは物語り論の功績だと言つてもよいであろう。」このように、歴史叙述の物語り性は一定程度認められているといえる。

- (5) 岡本充弘『過去と歴史「国家」と「近代」を遠く離れて』御茶の水書房・二〇一八年二月二〇日
- (6) 富山多佳夫『文化と精読 新しい文学入門』・名古屋大学出版会・二〇〇三年九月二十日
- (7) 石川淳『歴史と文学』『文藝情報』一九四一年三月五日
- (8) 田中貴子氏は、『悪女伝説の秘密』角川書店・二〇〇〇

年九月二五日で、「女帝としてただの人」として読み替えた坂口安吾の「道鏡」が継承発展され、主に男性の研究者による「称徳・道鏡純愛説」となったと述べている。そしてそれは、「称徳は彼の肉体ではなく学識や思いやりの深さに愛情を感じたのであり、二人の結びつきは真実の愛であった、という。」としている。

(9) 同前。

(10) 田中氏は「称徳・道鏡純愛説」を採る著者たちが「称徳と道鏡の関係に触れるとたちまちロマンティックな気分が漂ってしまうのは不思議である」と述べ、その例として、横田氏の『道鏡』から「そうした孤独の寂寥感が、いくら意図が強く、はげしい気象だといっても、女性である天皇をさいなんだのではなからうか。その時、そのさびしさを理解してくれる人をもとめる天皇の前にあらわれた道鏡は、ゆつたりとした、どこか闊達な気分を身のまわりにたたえていて、天皇の孤独感・寂寥感をやわらげるものがあつたのではないだろうか。」という文を引用している。

(11) 横田健一『道鏡』・吉川弘文館・一九五九年三月二五日

(12) 横田健一『道鏡』『続日本紀』にみられる称徳天皇の行動や詔勅にみられるところも、天皇の強い意志や激しい気象

をしめして、たとえば淳仁天皇をたしなめられた口調や、皇族や仲麻呂その他の叛逆者などを責められることばは実に鋭く、激烈である。」

(13) 『六道遊行』第九章「それぢやよ。宿曜とはもと天然における天文の学より出たな。星は七曜二十八宿にわかれてそれぞれ神の座ぢや。人界の吉凶善悪の相すべてここにあらはれる。禍福は星のつかさどるところなれば、天界の運行を見て地上の未来をさとる。これぞ咒の法よ。法力の神通なるものをもつてすれば、星のうごきの舵を取つて、禍を転じて福とすることが出来る。人間の運命を變じて現世の利益を計ることも至難のわざではないて。この秘法を医におこなふときは、病おのずからしずまる道理ぢや。」

横田健一『道鏡』「宿曜とはインドの天文学において、星を七曜・九執・二十八宿等に分ち、これらの星や星座を神の住所もしくは神自体であるとし、人界・天界一切の事象はこの宿曜に反映して、吉凶の相はこれにあらわれるから、その運行をみることによって人界の運命も予定せられるものとす、一種の占星術である。ゆえに宿曜秘法を修して、この宿曜の運行にはたらきかけ、これを左右することは、人間の運命にはたらきかけ、これを左右しようとするのである。宿

曜の力を自分の都合のよい方向にむけて、現世の幸福をつかみとろうとする咒術である。」

(14) 『水鏡 全評釈』笠間書院・二〇一一年一月一日「この女帝は、その退廃や快樂追求に他人よりも一層惑溺しての五十年余を生き、そして墮獄のような死に方をされたのは、正に一つの警世の生き方であり、一つの得難い教訓のような人生であったと言えよう。反面教師という言葉が嘗て用いられた事があるが、称徳天皇という一人の女帝の生と死を、このように受けとめるべきだと思ふのですが、いかがなものでしょうか。—これが、本段末尾の作者の言いたい事なのである。」

『古事談』を読み解く』笠間書院・二〇〇八年七月一四日「文学的想像力を駆使してまで、悪名高き女帝の純愛や生の真実を、同情や共感を以て掘り起こすといった作業は、おおよそ『古事談』とは無縁なものであった。／やはり、称徳女帝に對する顕兼の眼差し・処遇には、かなり酷薄なものがあつたとみてよいだろう。(中略) 結局のところ、この巻第一話については、年甲斐もなく野放図な性欲に狂った老女帝の、これ以上ない無様な死を描いたものと、冷酷に突き放して読むのが正解となりそうだ。」

(15) 「姫のみかどの死の顛末」の典拠である『古事談』は、「新注 古事談」の解説によれば「諸本間には際違った異同が認められず、系統樹を描くことも難しいとされている」。よつて、石川がどの諸本を選択したかは本稿では問題にしない。

(16) 松村武夫「水鏡の諸本」『歴史物語講座 第五卷 水鏡』・風間書房・一九九七年八月三十一日『水鏡』の諸本は、『国書総目録』には約五十本が掲載されており、これらは、古本系と増補本系に大別できる。古本系の諸本の本文には大差なく、書写の精粗による差異が問題となる。」

(17) 『新注 古事談』・笠間書院・二〇一〇年十月三〇日「称徳天皇、道鏡が陰猶ほ不足に思し食されて、暑預を以て隱の形を作り、之を用ひしめ給ふの間、折れ籠むと云々。仍て腫れ塞がり、大事に及ぶの時に、小手尼〔百済国の医師、其の手嬰子の手の如し〕見奉て云く「帝の病癒ゆべし」と。手に油を塗り、之を取んと欲す。爰に右中弁百川〔靈狐なり〕と云て、劍を抜て肩を切ると云々。仍て療ずる事無く帝崩す。」

(18) 『水鏡』(古本系)・増補新訂国史大系第二十一卷上 水鏡・大鏡』・国史大系刊行会・一九三九年五月一日「道鏡御門の御心を、いよいよゆかしたてまつらむとて。おもひかけぬものをたてまつれたりしに。あさましきこといできて。なら

の京へかへらせおはしまして。さまぐの御くすりどもありしかども。其のしるしさらに見えざりしに。あるあま一人いてきたりて。いみじき事どもを申て。やすくおこたりたまひなんと申しを。百川いかりてをひいだしてき。みかどつゐにこのことにて八月四日うせさせたまひにき。」

(19) 『水鏡』『増補新訂国史大系第二十一卷上 水鏡・大鏡』(増補本系)・国史大系刊行会・一九三九年五月十五日「彼百川思余て。御門の御為に御病の毒と成せ給べき物。其思懸無物を由義の宮の御参籠の時奉に。此時御門あさましき御病悩に煩給て。奈良の京へ帰らせ御座て。様々の御葉共あり然共。其験更に見へ給はざりしに。有尼一人出来て。いみじき事共を申て。此御病安く癒奉なんと申し、に。百川是を聞大きにいかりて。彼尼を追出しき。御門は遂に此病にて其年八月四日に失せ給にき。」

(20) 注18に同じ。

(21) 同前。

(22) 注17に同じ。

(よしだ たくや／本学大学院生)